

目の飛び見



作・jump NOZAKI

0の発見

今日は校門に幽霊がいなかったからと、あの子は登校してきた。

「今晚は」

「こんばんは」いつもながら表情がない。

「今日は、君の教室で勉強しようね」

「・・・。あ、はい」ちょっと、緊張の色が見える。

登校といっても、今は午後七時を過ぎている。不登校のあの子にようやく、人のいない時間になら学校に行けると決心させた。月に数回のその日には、数学と国語を合わせて一時間前後勉強する。

あの子には、幽霊を見る能力があるらしく、せっかくの登校が校門にひっそり立つ幽霊に阻まれることもたびたびあった。

「いつも出てくる幽霊ってどんなの」

「男の人の霊で、全体的に黒っぽい」

話しながら教室に向かう。あの子のスリッパの音が誰もいない廊下に響く。

今日は、中一の最初の分野。正の数負の数の学習だ。数学教師の私は、0の話をする。0はとても重要な数だ。二つの意味を持っている。一つ目は、「何もない」ことを表す。ないことを表すことは人類の歴史上すばらしい発明だった。人は今までそこにあったものが失われて初めてその存在の重さを知る。あの子の席は昼間、持ち主がいない。誰も座っていない座席がある。しかし、かろうじて、あの子の存在はこの席の存在で意識される。0は「ない」という存在を表す。

あの子の見た幽霊を、僕は見るができない。僕にとって見えないものの存在をあの子は語ってくれる。ないということを表す0のように。

二つ目は、そう、「二つ目」の前には、必ず「一つ目」がある。その前に何があるのか。「半人前」という言葉がある。半人前の半人前は四分の一人前。その半人前は、八分の一人前。どんどん0に近づいてゆく。0はスタート地点だ。負の数を学べば、0は正の数と負の数の真ん中にいつも存在する。前進でも後退でもない、原点の0。あの子はその原点に立ちすくんでいる。

「0ってどこで発明されたんですか」

あの子が初めて僕に質問をした。

「インドだと言われているけど、多くの人が使いだして0が認められたんだ。0は、発明された

というよりも多くの人が発見したと言ってもいいかもしれないね」

あの子も学校に来れば、みんなから存在を認知されることだろう。あの子が輝く場は、あの子の家にはない。

あの子は、今度昼間に学校に来ると言っている。明るい時は幽霊が校門で待ち伏せしていないし、クラスの間も、幽霊ほどは怖くないことを感じたのかもしれない。0からの出発ができるだけのエネルギーが貯まったのかもしれない。

数日後、あの子は、普通の生徒と同じように登校してきた。みんなと同じ制服で、みんなと同じに靴を履いて。周りの生徒も普通に対応している。とっても緊張しているはずなのに。

授業が始まる。

「起立。れい！」

ああ、もう「れい」は十分だ！